

「死」について回答した言葉と連想語

上 蘭 恒太郎

Antworten und Assoziationen zum Begriff „Tod“

Kohtaro KAMIZONO

死の概念について、「死ぬとはどんなことか」と質問紙で尋ねた結果と、「死」から連想する言葉とを比較検討した。対象は小学校4年生から中学校3年生まで、および大学生、質問紙1,790人、連想1,094人。小学校4、5年生の連想語の一位は「自殺」であり、小学校5年生以後は「怖い」であった。また「原因」「儀式」のカテゴリに関する言葉は連想に多く、死後どうなるかに関わる言葉「魂・霊」「事柄」「説明」は質問紙に多く、「人」に関しては両者に共通していた。

I 「死」からの連想語

子どもたちが「死」から連想するのは、小学校4、5年生で「自殺」がトップ、小学校5年生から大学生までは「怖い」が第1位になる¹⁾。5年生では「自殺」と「怖い」の二つが同数であった。一人あたりの連想語数は、小学4年生から大学生まで、4.13語から5.38語とほぼコンスタントに増える²⁾。すなわち一人が連想する死に関する言葉の量は年齢とともに増加する。

表1 「死」からの主な連想語とその割合

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	大学生
自殺	47.3%	37.3%	18.0%	17.9%	27.0%	18.8%	11.7%
怖い	39.5%	37.3%	34.0%	39.5%	32.5%	38.9%	30.9%
殺人	27.1%	12.4%	6.0%	3.7%	6.7%	8.1%	1.60%
天国	26.4%	13.7%	15.3%	18.5%	17.8%	17.4%	14.4%
地獄	20.9%	14.4%	12.7%	16.0%	16.6%	15.4%	12.2%
悲しい	17.8%	20.3%	27.3%	32.1%	25.8%	26.2%	23.4%
いのち	13.2%	7.2%	7.3%	8.6%	8.6%	16.1%	10.1%
いじめ	11.6%	9.2%	7.3%	6.8%	8.6%	6.0%	5.3%
嫌	10.9%	17.0%	14.0%	11.7%	8.6%	11.4%	5.9%
事故	11.7%	7.9%	8.6%	11.1%	17.8%	15.4%	10.1%
葬式	6.2%	7.8%	6.0%	10.5%	16.6%	6.7%	11.2%
病気	6.2%	13.1%	6.0%	11.1%	13.5%	10.1%	18.6%

百分率は各学年の人数あたりの連想語の割合。「事故」は「交通事故」を含み、大学生の「いのち」は「生命」に当たる。

主要な連想語のうち各学年上位に共通なものをあげると、表1のようになる³⁾。

表1を見ると、次の点が目につく。「自殺」が小学校5年生から6年生で急激に減少して18%前後になり、中学校2年生で27%と高いものの、減少していく。「悲しい」という感情表現が小学校6年生以後変わらず第2位を占め、中学校1年生で高く中学校2年生からあとは25%前後である。「いじめ」は調査したすべての学年で思い出される言葉であり、中学校3年生で「いのち」が多くなるものの、「いのち」と「いじめ」は同様の割合を示す。「怖い」「嫌」だという感情はいくらか減少傾向にあるが、どの学年にもコンスタントに現れる。「天国」「地獄」(図1では「他界」にまとめてある)は小学校4年生に多く、大学生まで現れる。

主要な連想語について、「病気、事故、自殺」を死の原因とみなして一括して、図示すると次のようになる⁴⁾。「いのち」と「いじめ」は、線の重複を避け、また後の図4との比較を容易にするために横軸の下に描いた。百分率は各学年の人数比である⁵⁾。

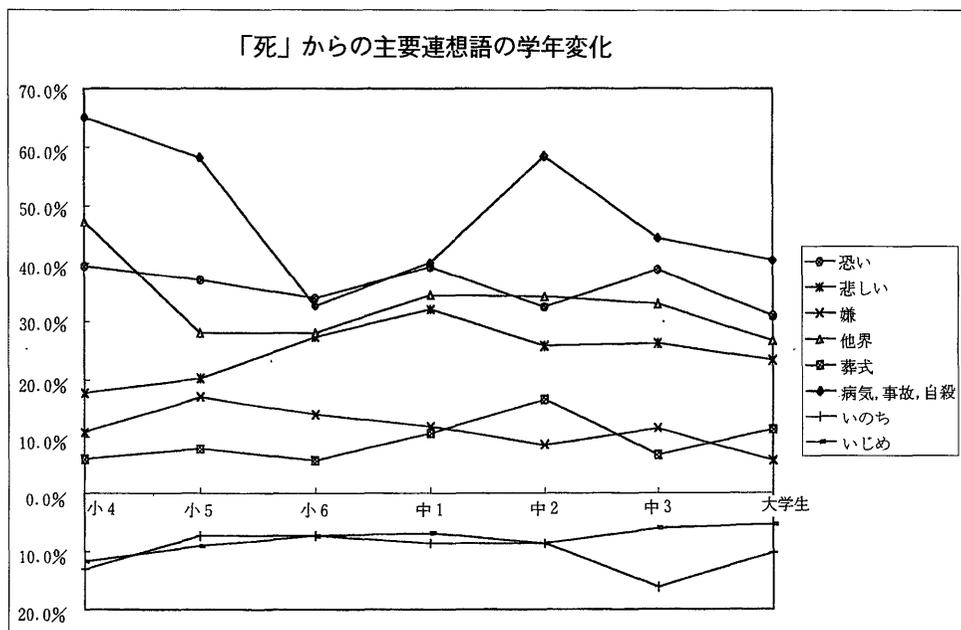


図1

「死」から連想する言葉として「いのち」は、小学校4年生から中学校3年生まで、7.2% (小5) から16.1% (中3) の範囲で変化する。逆に、「いのち」から連想する言葉としての「死」(死ぬ, を含む) は、10.0%から (小4) から20.5% (小6) までの範囲で変化する。「いのち」から「死」への連想がいくらか多いものの、二つはそれぞれから安定して思い起こされる概念である。

また、「死」では上位に「怖い」「悲しい」「嫌」など拒否する感情語が並ぶが、「いのち」の場合はその年齢段階でも「大切」が一位、「一つ」が二位である。「大切」は、ほぼ半数を超える子どもたちが挙げる。拒否の感情と大切はそれぞれ「死」と「いのち」に対する基本的反応である。

II 「死」のカテゴリによる分類

連想による言葉をすべてカテゴリに分けると次の結果になった。

表2 連想によって出された言葉のカテゴリ別学年別分類

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	大学生	全体
原因	38.6%	37.1%	23.0%	19.1%	26.3%	23.3%	14.8%	24.9%
事柄	10.5%	7.5%	10.3%	12.3%	9.6%	10.6%	9.8%	10.1%
他界	12.0%	7.4%	6.8%	8.7%	8.0%	7.6%	6.3%	7.9%
人	2.1%	2.7%	8.9%	5.8%	7.7%	8.9%	7.3%	6.4%
儀式	3.9%	5.5%	4.4%	6.4%	7.7%	4.2%	5.0%	5.4%
説明	3.2%	2.7%	2.9%	5.8%	5.7%	4.8%	7.9%	5.0%
魂、霊	1.3%	1.2%	1.1%	1.2%	0.9%	0.3%	0.6%	0.9%
その他	8.4%	11.8%	17.4%	9.8%	13.1%	16.3%	25.5%	15.4%
感情	19.9%	24.1%	25.2%	30.7%	21.0%	24.0%	22.7%	23.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

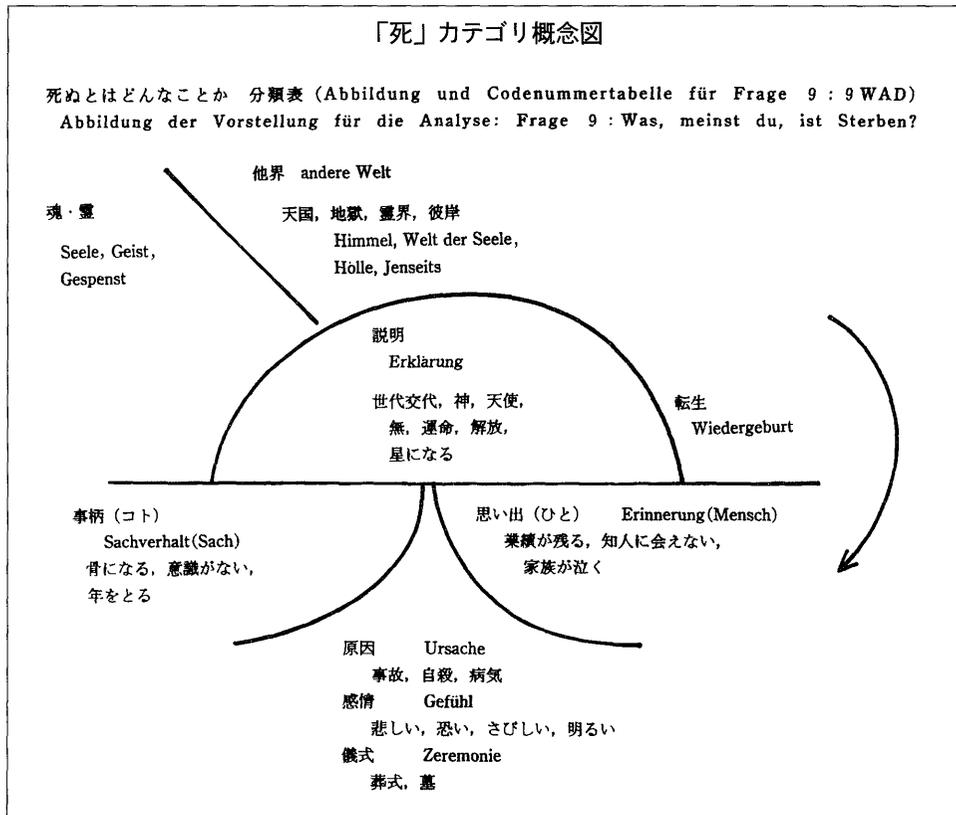


図2

調査票による回答と連想語を共通に分類するためのカテゴリを図2のように設定した。

中央の横線で此岸と彼岸を分けた。此岸を大きく3種類に分け、「事柄」「人」、そのほか、死の「原因」「感情」「儀式」に関わるもの、彼岸は3つに分け、「説明」「魂・霊」「他界」、さらに彼岸から此岸に移る「転生」、の7つである。

連想語で「転生」は百分率に取り上げる量ではなかった。

図3はカテゴリに分けた連想語数が連想語全体に占める割合を示す。左端が「原因」カテゴリで全体として最も多く、それと変わらぬほど多い「感情」を見やすいように右端に配置した⁶⁾。

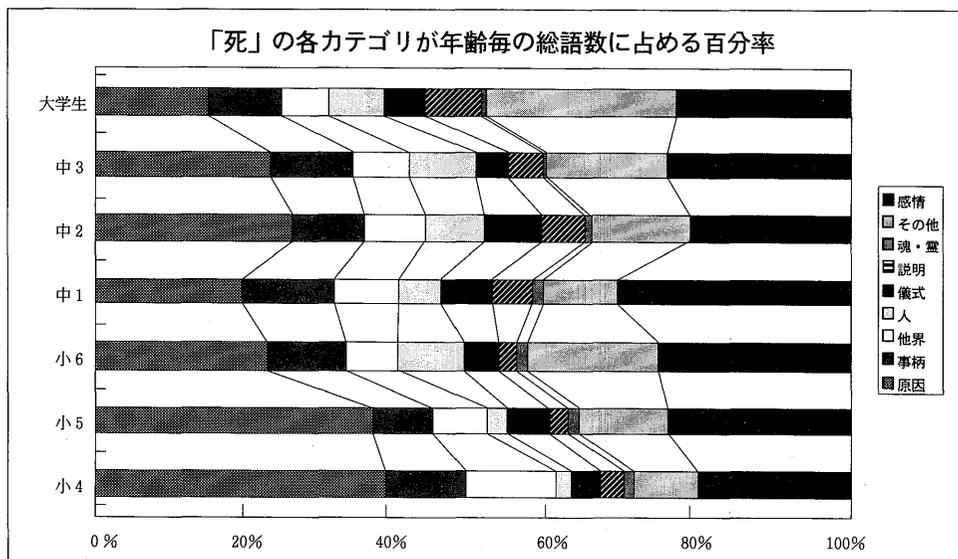


図3

図3から次の点がみてとれる。「原因」カテゴリは全体として学年進行とともに減少する。「感情」表現は割合コンスタントに現れる。大学生では「その他」が多い。その内容は、生20.2%、生きる3.7%、絶対来る3.7%、避けられない3.7%などである。死に対するさまざまな考え、「説明」の占める割合は少しずつではあるが年齢とともに増えていく。「事柄」はおよそ1割ではほぼ一定している。「他界」が小学校4年生で高いほか6.3%から8.7%の間で安定して推移する。「人」が小学校6年生以降増えて5.8%から8.9%で安定する。

Ⅲ 「死ぬとはどういうことか」に対する回答

「死ぬとはどんなことだと思いますか」と質問紙によって尋ねた場合、答えは違ってくるのであろうか。質問紙による答えをカテゴリに分けたものを以下に示す。質問紙の問いの全文は、「死ぬとはどんなことだとおもいますか？ あなたが かんがえていることをおしえてください」である。

表3 「死」についての質問紙による回答の年齢別カテゴリ百分率

	事柄	感情	説明	人	わからない
03	17.5%	3.5%	5.3%	0.0%	57.9%
04	20.5%	10.6%	2.5%	3.7%	53.4%
05	19.4%	15.2%	1.9%	2.4%	47.9%
06	19.4%	23.5%	0.0%	2.4%	40.1%
07	23.0%	36.0%	0.6%	2.1%	35.4%
08	29.0%	37.0%	3.8%	3.8%	22.9%
09	32.7%	31.2%	2.0%	3.5%	21.6%
10	37.0%	20.9%	7.1%	5.2%	16.6%
11	46.7%	12.0%	7.8%	6.6%	9.0%
12	51.1%	16.9%	12.9%	12.4%	3.4%
13	51.5%	12.5%	14.7%	8.3%	8.8%
14	41.4%	11.1%	25.9%	10.8%	11.8%
15	50.5%	11.3%	33.2%	10.1%	7.2%
16	49.0%	9.7%	24.3%	10.7%	12.6%
17	44.6%	7.8%	27.1%	12.0%	18.7%
18	44.1%	2.9%	26.5%	0.0%	16.2%
20	40.6%	7.9%	30.6%	9.7%	13.9%
全体	37.5%	6.7%	14.1%	17.7%	20.9%

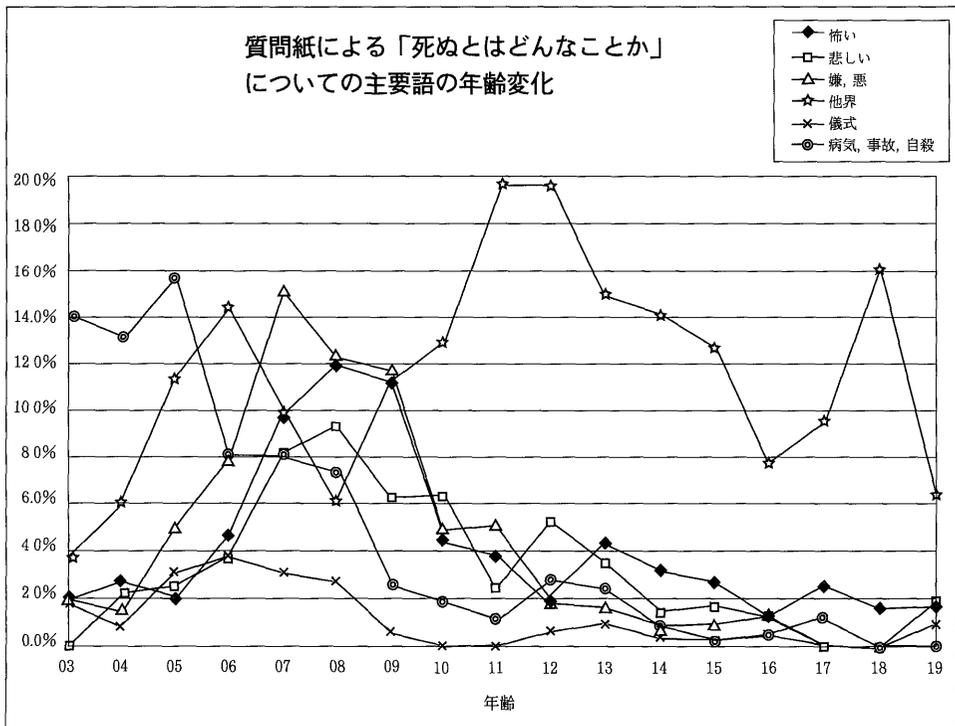


図4

IV 比較考察

小学校4年生から中学校3年生および大学生についての連想調査のカテゴリ百分率（人数比）でみると、「人」のカテゴリは微増である。連想調査の当該箇所（特に小学校6年生）は、質問紙の同カテゴリでも微増とはいえ、最も増加傾向の強い部分（特に12歳）に当たる。

「説明」カテゴリについては、質問紙では増加しはじめる年齢が、連想語では横這いである。おそらく30秒という連想時間では、世代が変わる、摂理だ、といった、考える過程を多少とも必要とする「説明」の反応は出にくいのであろう。

「事柄」は質問紙では増加傾向を示すが、連想では微増してのち横這いである。「死」からの連想で事柄に関わる言葉を多く書くのは難しい、むしろテスト形式のゆえに感情語が出やすいということであるのか、日本人のメンタリティが感情に傾いており、したがって日本人にとって短時間となると「感情」語が出やすいという文化的要素が関わるのであろう。

質問紙では減少傾向にある「感情」が、連想語では増加傾向にすら見える。質問紙の問いかけ方は、設問を理解する年齢になるほどに「考え」であって「感情」ではないと理解されやすく、感情語が抑えられやすいのであろう。連想の場合、思いつくことを書き並べていくのだから、人口に膾炙される言葉、ステレオタイプの反応が出やすい、また関連する体験があれば体験の場で抱いた感情が出やすいという事情があるのではないか。「感情」は、質問紙では7,8,9歳で高い割合を示す。質問紙ではどちらかといえば判断が出やすく、より新しく獲得した考えが記述される傾向があり、「感情」が少なくなる、しかし7,8,9歳で形成された感情語が消えるわけではなく、連想となるとすでに手慣れた感情語が出やすい、そのような仮説が考えられないか。

図1と4で具体的にみよう。「怖い」「悲しい」「嫌」という「感情」カテゴリに属する言葉が、図1ではいずれもおおまかに横這いといえるのに対して、図4では当該年齢で減少している。

「他界」が中学校1年前後で高い傾向は、図1と4の両方でみられるが、質問紙による調査の割合の高さが目につく。「天国」「地獄」は4年生ですぐ思いつくのであろう、中学生になる時期、死後の世界についてさまざまな考えをもつようになるが、それらは連想では現れにくいということであろう。

「葬式」「儀式」については13歳、中学校2年生で高くなり、双方の動きが類似している。それぞれのカテゴリの割合が全体として連想語で高く、質問紙で低いのは、次の事情によるだろう。連想語では、自分の意見としてはともあれ思いつく言葉を並べるところから、何がしかの反応を示すことが容易である。一人あたり4語から5語半ほど平均して書いている。それをカテゴリとして分類し、人数あたりの百分率として表示すると、1カテゴリあたりの百分率は高くなる。これに比べて、「死ぬとはどんなことか」と質問紙で問われると考えてしまう。書く際にも何かに絞ることが多く、カテゴリ分けした場合の種類数は連想ほど多くはならない。

連想の場合、一人あたりの語数は次のようになる。そして1語には分類上1カテゴリがあてられる。したがって、語数はカテゴリ数に即応する。

小4	小5	小6	中1	中2	中3	大学生
4.13	4.42	4.21	4.45	5.19	5.06	5.38

質問紙の場合、一人あたりのカテゴリ数は1前後になる。すなわち連想による場合は、およそ4倍程度のカテゴリ量があることになる。質問紙の場合の一人あたりのカテゴリ数を示す。

9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	20歳
0.89	0.94	1.10	1.35	1.23	1.27	1.12

ひとつ一つのカテゴリになると、その倍率はさらに異動が激しい。質問紙で現れるカテゴリの何倍が連想で現れるかによって、質問紙での回答と連想による答えの差をみたい。次のように算出した。連想による学年に対応させるために、9歳から14歳、20歳を質問紙のデータから合算し、人数あたりのカテゴリの百分率を算出する。さらに連想の百分率と比較し、質問紙における当該カテゴリの百分率の何倍が連想における百分率にあたるかを算出したのが下の数字である。つまりこの数字は、連想に関する表2の全体の数字を人数あたりに換算し、質問紙に関する相当の数字で除したものになる⁷⁾。

原因	事柄	他界	人	儀式	説明	魂・霊	その他	感情
88.94	1.32	3.34	4.43	51.5	1.74	0.60	4.98	9.17

連想による反応語のカテゴリ数が質問紙による回答のカテゴリ数のおよそ4倍という点を基準にすると、4倍を下回るカテゴリは質問紙による回答の方が多いものとみなすことができる。すると「魂・霊」「事柄」「説明」が、質問紙の方に多い。また「他界」に関しても同様の傾向にある。質問紙では、死んでどうなるか、死後に関する答えが多く出されるということになる。また死に関する説明は質問紙によるほうが出やすい、「説明」には二重の意味で時間が必要ということであろう。すなわち書くために考える時間と、納得できる説明を自分のなかで探す年齢的な時間である。図3、すなわち連想においても「説明」は年齢とともに徐々に増えていた。

「人」のカテゴリは4.43で、連想と質問紙の双方に同じように出てくる。

そのほか「原因」と「儀式」が連想調査の方に多いことが目立つ。「原因」は死に関連して、自分の可能性としてであれ他人の場合であれ思い浮かべやすく、一つ連想すると関連する要因を思い浮かべやすい、したがって多くの連想語が記述されるのであろう。「儀式」もまた死を具体的に思い浮かべようとしたときに容易に連想されるのだらう。これに比べて質問紙の場合、「原因」や「儀式」は死そのものについての回答ではないとの抑制が働くのであろう。さらに、質問紙では、死んでどうなるのか、魂や霊を考え、事実として死が何をもちたらすか（骨になる、動かない、など「事柄」）を思い、死についてのさまざまな「説明」をおこなう、したがって「魂・霊」「事柄」「説明」カテゴリが多くなるということだろう。

質問紙による場合、死とは何か、反省過程を経て自分の考えを書くことになる。これに対して、連想による場合、死に関して日常流れている情報に「原因」や「儀式」が多いことが影響するのではないか。ニュースでの死は多くの場合事故であり、子どもにとって気をつけなさいと日頃親に聞かされるのが交通事故である、体験できる死は多くの場合儀式であり、そうすると死に関して思い浮かぶ情景は事故や儀式であると考えられる。

連想による調査で単独の言葉として最も頻度が高い「自殺」と「怖い」は連想がどのようにおこなわれるか、要因の大きな二つを示しているのかもしれない。

調査時期に子どもたちの関心が高く、マスコミで話題となった「いじめ」による自殺が、

影響をおよぼしているのであろう。影響の量を、表1による「いじめ」が1割前後あるところから、いじめ、自殺、死、の連想が、その分程度は働いたと推察できる。その分がいじめによる自殺の情報が多く流れている時期の反応なのではないか。さらに日本の、自殺による死亡者数が交通事故による死亡者よりも多いという事実を生み出している風土が子どもたちに反映しているのであろうか⁸⁾。

いずれにせよ、「自殺」が小学校4、5年生の連想語の一位にくるという事実は看過できない。「いのち」が「大切」で「一つ」しかないというメッセージが、どこまでの内容を伴っているか十分ではないとしても、ともかくも伝わっているとすれば、「自殺」を第一に思い起こさせる事態は、努力によって改善できよう。

改善できる点では「怖い」も同様であろう。「怖い」が多いのは、これが多くの人が死に対してもちあわせている基本的な反応だということを意味する。「怖い」は、死に対する否定の気分が感情語として現れたのであろう。その中には、死のタブー視が感情として定着している部分もあろう。タブー視をなくすことはできないとしても、死に関わって対話が少ないという日本の現状を思えば⁹⁾、二つの努力は可能である。一つは死に関する適切な情報を子どもたちに伝えること、二つには死に対する構えを対話によって伝えること。適切な情報と安心によって「怖い」感情も緩和できるように思える。それが現状の日本の子どもたちにとって特に必要だと思う。

註

- 1) 連想法については糸山景大教授に教示を受けた。連想の着想と実施方法は糸山教授の示唆に負う。連想語の入力プログラムは藤木卓助教授のマイクロソフト・エクセル・アドインによる。連想調査から論述の一連の過程は上巻の責である。

連想調査は次のようにおこなった。子どもたちが「死」という言葉から何を連想するかを、長崎市内の小学校4年生から中学校3年生まで、小中学校計4校、27クラス、906名、大学生では188名に尋ねた。1語あたり30秒で「思いつくことば」(小学生)「連想する言葉」(中学生および大学生)を、小中各学年2校、4ないし5クラスの子どもたちに書いてもらった。大学生は、長崎大学教育学部3年生、4つの課程にまたがる学生。大学生はおよそ20歳、後に質問紙票による20歳前後と比較するが、20歳と大学生とは大差ない。調査時期は1996年6、7月。

質問紙による調査の対象は総計3974人、3歳から20歳前後まで。3歳から18歳までの調査は、長崎市、佐世保市、東彼杵郡、時津町、五島、平戸市、熊本市の、保育園、幼稚園、学童保育所、小学校、中学校および高等学校、20歳に対する調査は、長崎市内の大学、短期大学、看護学校、長崎市内の公民館で、1991年から1995年の間におこなった。連想調査と比較する対象としたのは、9歳から14歳、20歳で、その人数は計1790人である。

- 2) 当該数字の全体は、本論文「Ⅳ 比較考察」の中ほどに示した。
3) 人数比で10%を越える言葉を各学年多い順にあげておく。

小学校4年生で

自殺 (47.3%)、怖い (39.5%)、殺人 (27.1%)、天国 (26.4%)、地獄 (20.9%)、悲しい (17.8%)、命 (13.2%)、いじめ (11.6%)、嫌 (10.9%)、死ぬ (10.9%)

小学校5年生で、

自殺 (37.3%)、怖い (37.3%)、悲しい (20.3%)、嫌 (17.0%)、地獄 (14.4%)、天国 (13.7%)、病気 (13.1%)、殺人 (12.4%)、他殺 (10.5%)

小学校6年生で、

怖い (34.0%), 悲しい (27.3%), 自殺 (18.0%), 天国 (15.3%), 嫌 (14.0%), 地獄 (12.7%)

中学校1年生で、

怖い (39.5%), 悲しい (32.1%), 天国 (18.5%), 自殺 (17.9%), 地獄 (16.0%), 嫌 (11.7%), 病
気 (11.1%), 葬式 (10.5%)

中学校2年生で

怖い (32.5%), 自殺 (27.0%), 悲しい (25.8%), 天国 (17.8%), 葬式 (16.6%), 地獄 (16.6%),
病気 (13.5%), 事故 (12.9%)

中学校3年生で

怖い (38.9%), 悲しい (26.2%), 自殺 (18.8%), 天国 (17.4%), 命 (16.1%), 地獄 (15.4%), 生
(14.1%), 事故 (13.4%), 嫌 (11.4%), 病気 (10.1%)

大学生で、次のようである。

怖い (30.9%), 悲しい (23.4%), 生 (20.2%), 病気 (18.6%), 天国 (14.4%), 暗い (12.8%), 終
わり (12.8%), 地獄 (12.2%), 自殺 (11.7%), 葬式 (11.2%), 事故 (10.1%), 生命 (10.1%)

4) 図1に関する数値を以下に示す。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	大学生
怖い	39.5%	37.3%	34.0%	39.5%	32.5%	38.9%	30.9%
悲しい	17.8%	20.3%	27.3%	32.1%	25.8%	26.2%	23.4%
嫌	10.9%	17.0%	14.0%	11.7%	8.6%	11.4%	5.9%
他界	47.3%	28.1%	28.0%	34.6%	34.4%	32.9%	26.6%
葬式	6.2%	7.8%	6.0%	10.5%	16.6%	6.7%	11.2%
病気, 事故, 自殺	65.2%	58.2%	32.6%	40.1%	58.3%	44.3%	40.4%
いのち	13.2%	7.2%	7.3%	8.6%	8.6%	16.1%	10.1%
いじめ	11.6%	9.2%	7.3%	6.8%	8.6%	6.0%	5.3%

5) 「病気, 事故, 自殺」が小学校4, 5年生で多く、傾向としては減少していく。そのなかで、中学2年生の「病気, 事故, 自殺」が突出しているが、中学校2年生では「事故」も「自殺」も「病気」も多いからである。特に中学校2年生という学年がこれらの語の連想の多い年齢段階だとは考えにくい。これらを含めて死の「原因」としてまとめ、総語数に占める割合を出した表2でみても高い割合を示すが、図1ほどの突出した印象はないであろう。

6) 図3に関わる数値は以下のとおりである。

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	大学生	全体
原因	38.6%	37.1%	23.0%	19.1%	26.3%	23.3%	14.8%	24.9%
事柄	10.5%	7.5%	10.3%	12.3%	9.6%	10.6%	9.8%	10.1%
他界	12.0%	7.4%	6.8%	8.7%	8.0%	7.6%	6.3%	7.9%
人	2.1%	2.7%	8.9%	5.8%	7.7%	8.9%	7.3%	6.4%
儀式	3.9%	5.5%	4.4%	6.4%	7.7%	4.2%	5.0%	5.4%
説明	3.2%	2.7%	2.9%	5.8%	5.7%	4.8%	7.9%	5.0%
魂・霊	1.3%	1.2%	1.1%	1.2%	0.9%	0.3%	0.6%	0.9%
その他	8.4%	11.8%	17.4%	9.8%	13.1%	16.3%	25.5%	15.4%
感情	19.9%	24.1%	25.2%	30.7%	21.0%	24.0%	22.7%	23.9%

7) 使用した百分率は質問紙の場合、9から14歳、20歳で、以下のようである。

原因	事柄	他界	人	儀式	説明	魂・霊	その他	感情
1.6%	43.5%	13.5%	8.3%	0.6%	16.4%	8.7%	17.7%	14.9%

また連想の当該数字，人数比で表2の全体にあたる実数を百分率として算出すると次のようになる。

原因	事柄	他界	人	儀式	説明	魂・霊	その他	感情
142.3%	57.5%	45.1%	36.8%	30.9%	28.6%	5.2%	88.1%	136.6%

- 8) 子どもの自殺は，先進諸国に共通するとはいえ，日本は全体として高い。cf.清水一彦，伊藤稔ほか；教育データランド'96-'97，1996，時事通信社，93頁を参照。
- また日本の死亡者数をみると，平成6年で自殺者が21,679人，これに対して道路交通事故による死者が10,649人である。(木本書店・編集部；白書の白書，平成8年，226，325頁)
- 9) 次の論文を参照。上蘭恒太郎；死について子どもたちは誰に聞くか —— 日本とドイツでの調査研究 —— ，長崎大学教育学部教育科学研究報告第49号，1995年6月